

〔原著〕

中学生への視覚提示刺激としての感情語の収集

—脅威関連語, 抑うつ関連語, 怒り関連語, ポジティブ語について—

筑波大学人間総合科学研究科：大島 由之
宮崎大学教育文化学部：佐藤 寛
筑波大学心理学系：新井邦二郎

A collection of emotional words for visual presentation to junior high school students:
Threat-related words, depression-related words,
anger-related words, and positive words

Yoshiyuki Ohshima, Hiroshi Sato and Kunijiro Arai

問題と目的

近年, 主に認知心理学で用いられてきた情動ストループ課題や語彙決定課題などの情報処理理論に基づく実験的手法を用いた認知の測定法を用いて, 不安や抑うつといった気分の問題と情報処理バイアスとの関連を検討することを目的とした研究が数多く行われている(金築・伊藤・山田・境・青山・金井・小山・増田・石川・腰・佐藤・吉田, 2002)。こうした研究はこれまで主に成人を対象として行われてきたが, 児童や生徒を対象とした研究も行われるようになってきている(Ehrenreich & Gross, 2002)。

これらの研究の多くにおいて, 脅威や抑うつなどに関連した感情的な内容の単語(以下, 感情語と呼ぶ)を被験者に対して視覚提示する方法が用いられてきた。しかしながら気分と情報処理バイアスの研究の多くにおいて, 感情語に関する記載はわずかであり, 研究者が一定の基準の元に主観で感情語の選定を行ったと思われるものや, 予備調査として研究者が選定した感情語候補に対して感情語の評定を行うもの(e.g. 五十嵐・嶋田, 2005; 藤原・岩永・生和・作村, 2002)に留まっている。この実験刺激としての感情語について詳細に検討した研究としては, 五島・太田(2001)のポジティブ語, ネガティブ語, ニュートラル語の感情価, 心象

性, 学習容易性, 使用頻度について検討, 坂本(2004)の脅威語の収集及び感情価の検討などがその例として挙げられる。しかしながら, これらはいずれも成人を対象とした検討であり, 児童・生徒を対象とした感情語の検討は海外を含め, 現在までほとんど行われていない。数少ない例であるNeshat-Doost, Moradi, Taghavi, Yule & Dalgleish (1999)は小中学生221名を対象に自由記述調査を行い, 実験課題で使用する視覚提示刺激として中性語, ポジティブ/ネガティブ形容詞, 感情語(Happy・Sad・Scary feeling / thing)を収集し, 産出数について発達差, 性差の検討を行った。被験者の発達段階に適した刺激の作成は, 児童や生徒を対象とした情報処理理論に基づく研究の信頼性, 妥当性を確保する上で不可欠であるとされており(Vasey, Dalgleish & Silverman, 2003), 単語の習得年齢(age of acquisition)や親和性(word familiarity)などといった単語処理に関連する感情価以外の混交要因(McDonald & Shillcock, 2001; Morrison & Ellis, 1995)を考慮した, 児童・生徒を対象とした実験課題で用いる視覚提示刺激としての感情語の収集が必要であると思われる。

そこで本研究では, 中学生を対象とした実験課題で用いる視覚提示刺激として, 妥当性の高い感情語を収集するために自由記述調査を行

い、脅威関連語、抑うつ関連語、怒り関連語、ポジティブ語の候補項目を収集することを目的とした。

方 法

調査対象 茨城県内の公立中学校に通う中学生117名(男39名,女78名)を対象とした。各学年の内訳は、1年生33名(男13名,女20名),2年生32名(男9名,女23名),3年生52名(男17名,女35名)であった。年齢は12~15歳,平均年齢は13.42歳(SD=.091)であった。

調査時期 2004年7月

手続き 各中学校のクラス担任に調査を依頼し、学活等の時間を用いて質問紙を配布・教示をしてもらい、集団で調査を実施した。

調査内容 「楽しいと感じる」「心配になったり、こわくなったり、緊張したりする」「落ちこんだり、悲しくなったりする」「怒ったり、イライラしたりする」状況や物事について、自由に記述を求め、また上記の気持ちを表現することばについて自由に記述を求めた。回答欄は10語分用意した。

結 果

1. 収集された項目の集計

収集された記述は、延べ3404項目であった。内訳としては脅威関連項目が835項目(状況・物事:469項目,表現:366項目),抑うつ関連項目が765項目(状況・物事:405項目,表現:360項目),怒り関連項目821項目(状況・物事:415項目,表現:406項目),ポジティブ項目が983項目(状況・物事:562項目,表現:421項目)であった(各カテゴリーの記述数の平均値はFig. 1およびFig. 2参照)。

2. 学年差, 性差の検討

感情語の自由記述数の性差と学年差を検討するために、性別と学年を独立変数,脅威関連項目(状況・物事/表現),抑うつ関連項目(状況・物事/表現),怒り関連項目(状況・物事/

表現),ポジティブ項目(状況・物事/表現)のそれぞれの記述数を従属変数とした 2×3 の分散分析を行った(Table 1)。

その結果,「不安を感じる状況・物事」,「抑うつ気分を感じる状況・物事」,「楽しさを感じる状況・物事」,「不安の表現」,「怒りの表現」,「楽しさの表現」に有意な性差が見られ(不安を感じる状況・物事: $F [1,] = 9.48, p < .01$;抑うつ気分を感じる状況・物事 $F [1, 111] = 9.89, p < .01$;楽しさを感じる状況・物事: $F [1, 111] = 4.63, p < .05$;不安の表現: $F [1, 111] = 4.71, p < .05$;怒りの表現: $F [1, 111] = 7.51, p < .05$;楽しさの表現: $F [1, 111] = 8.45, p < .01$),いずれも男子に比べ女子の方が有意に多く記述を産出していた。

また「怒りを感じる状況・物事」,「不安の表現」,「抑うつ気分の表現」,「怒りの表現」,「楽しさの表現」に有意な学年差が見られた(「怒りを感じる状況・物事」: $F [2, 111] = 3.52, p < .05$;「不安の表現」: $F [2, 111] = 7.49, p < .01$;「抑うつ気分の表現」: $F [2, 111] = 4.82, p < .05$;「怒りの表現」: $F [2, 111] = 3.67, p < .05$;「楽しさの表現」: $F [2, 111] = 3.31, p < .05$)。Tukey法による多重比較を行った結果,「怒りを感じる状況・物事」,「怒りの表現」,「楽しさの表現」において2年生に比べ3年生の方が有意に多くの記述を産出していることが示され,「不安の表現」と「抑うつ気分の表現」において1,2年生に比べ3年生の方が有意に多くの記述を産出していることが示された。また「抑うつ気分の表現」において有意な交互作用が見られ($F [2, 111] = 4.56, p < .05$),3年生において男子に比べ女子の方が多く記述を産出していることが示された。

3. 感情語候補の抽出

収集された3404項目について,視覚提示刺激として不適切な項目を削除し,感情語候補を特定するために,Neshat-Doost et al. (1999),坂本(2004)を参考に,項目の削除および表記の修正の際の条件を以下のように設定し,第一筆者を含む発達臨床心理学を選考する大学院生4

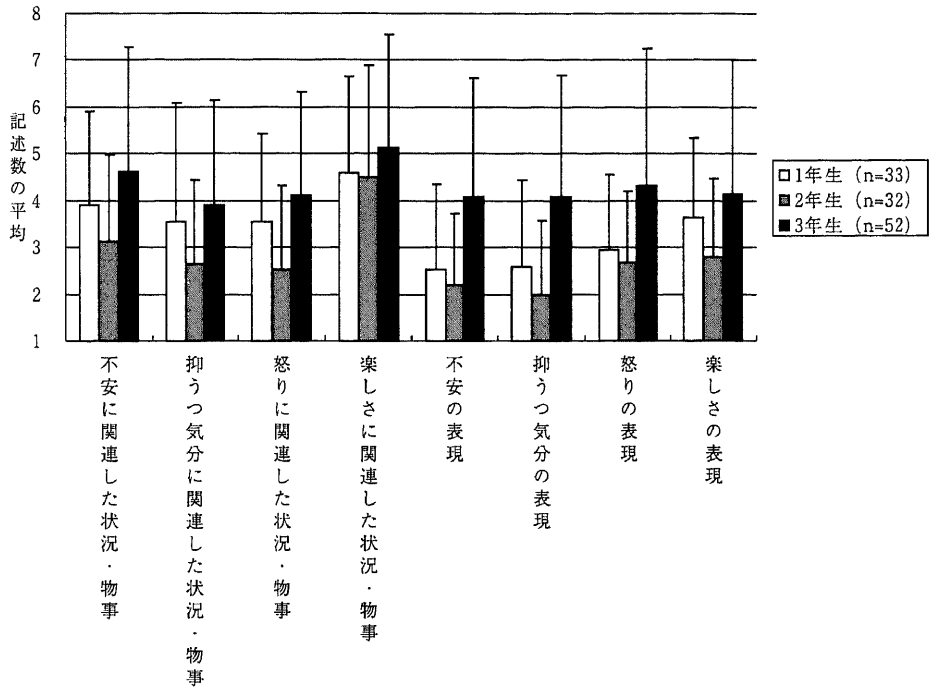


Fig. 1 学年ごとの自由記述数

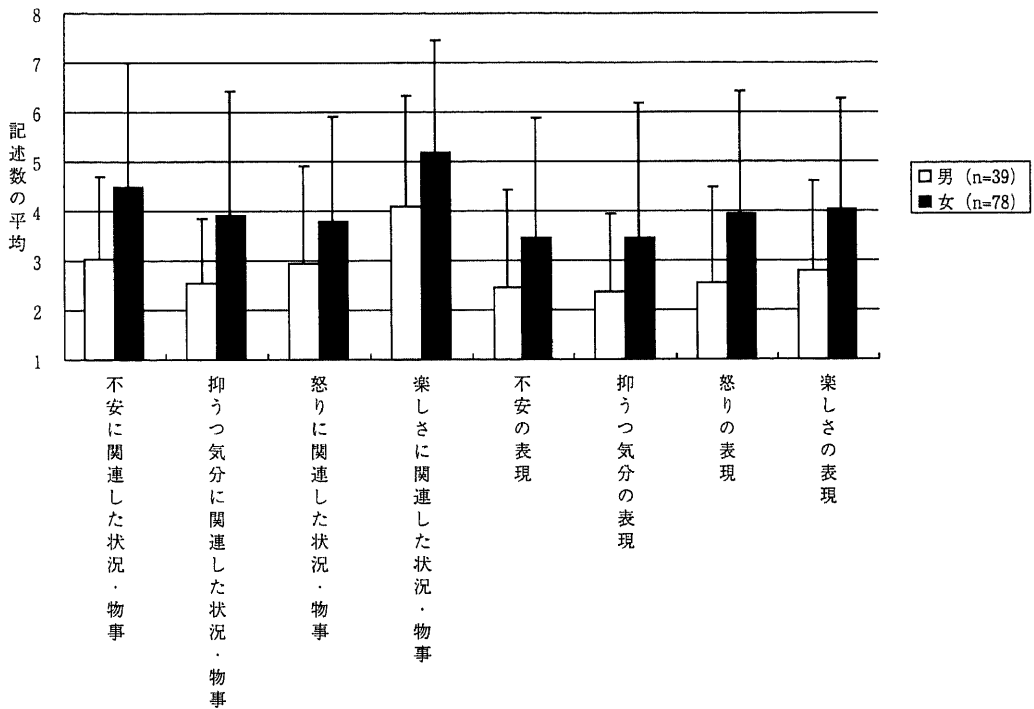


Fig. 2 男女ごとの自由記述数

Table 1 自由記述数の学年および性別ごとの差 (平均値とSD および Tukey 法による多重比較の結果)

学年 性別	1年生			2年生			3年生			分散分析		
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	性差	学年差	交互作用
被験者数	13	20	33	9	23	32	17	35	52			
不安に関連した状況・物事 女>男	3.38 (1.81)	4.25 (2.07)	3.91 (2.00)	2.56 (1.13)	3.35 (2.06)	3.13 (1.86)	3.00 (1.80)	5.40 (2.69)	4.62 (2.67)	9.48**	ns	ns
抑うつ気分に関連した状況・物事 女>男	2.38 (1.26)	4.30 (2.89)	3.55 (2.54)	2.33 (.86)	2.78 (2.04)	2.66 (1.79)	2.76 (1.56)	4.46 (2.34)	3.90 (2.25)	9.89**	ns	ns
怒りに関連した状況・物事 3年生>2年生	3.15 (1.77)	3.80 (1.96)	3.55 (1.89)	2.56 (2.07)	2.52 (1.70)	2.53 (1.78)	3.00 (2.09)	4.63 (2.10)	4.10 (2.22)	ns	3.52*	ns
楽しさに関連した状況・物事 女>男	4.62 (2.79)	4.55 (1.50)	4.58 (2.06)	3.67 (2.24)	4.83 (2.42)	4.50 (2.40)	3.88 (1.83)	5.74 (2.48)	5.13 (2.43)	4.63*	ns	ns
不安の表現 女>男, 3年生>1, 2年生	2.31 (1.55)	2.65 (2.06)	2.52 (1.86)	1.44 (1.24)	2.48 (1.62)	2.19 (1.58)	3.12 (2.34)	4.54 (2.62)	4.08 (2.60)	4.71*	7.49**	ns
抑うつ気分の表現 3年生: 女>男, 3年生>1, 2年生	2.23 (1.74)	2.80 (1.54)	2.58 (1.62)	2.44 (1.24)	1.83 (1.61)	2.00 (1.52)	2.41 (1.70)	4.89 (3.09)	4.08 (2.94)	ns	4.82*	4.56*
怒りの表現 女>男, 3年生>2年生	2.62 (1.66)	3.15 (1.72)	2.94 (1.69)	2.22 (1.09)	2.87 (1.87)	2.69 (1.69)	2.65 (2.52)	5.11 (2.74)	3.48 (2.41)	7.51**	3.67*	ns
楽しさの表現 女>男, 3年生>2年生	3.31 (2.21)	3.85 (1.57)	3.64 (1.83)	2.00 (.71)	3.09 (1.68)	2.78 (1.54)	2.82 (1.81)	4.77 (2.61)	4.13 (2.54)	8.45**	3.31*	ns

*p < .05, **p < .01

名による項目の修正および削除を行った。

1. 特定の国名, 地名, 人名等であると思われる記述の削除を行う。
2. 省略した表現で記述された項目については, 小学生用の国語辞書 (田近, 1997) を参照し, 省略前の項目と同じものと見なす (例: 『TV』と『テレビ』)。
3. 表記が完全に一致する項目のみを同じ項目と見なし, 同音の単語であるが, 表記が平仮名, 片仮名, アルファベット, 漢字など, 表記の形式が異なる記述が複数見られた場合は, 最も多い記述数の多い表記に統一する (例: 『ハッピー』, 『Happy』)。
4. 文章の形で記述された項目は, 4名の大学院生で協議を行い, 小学生用の国語辞典 (田近, 1997) を参照し, 単語の記述へと修正する。また修正の際に4名の意見が一致しない項目は削除を行う。

上記の条件の下での修正後, 出現頻度数が3以上の項目を感情語候補として特定した。その結果, 抽出された感情語候補は295語 (ポジティブ語: 90語, 脅威関連語: 70語, 抑うつ関連語: 75語, 怒り関連語: 60語) となった (Table 2)。

考 察

本研究の目的は, 中学生への実験課題で使用する視覚提示刺激として妥当性の高い感情語候補を収集することであった。本研究の結果, のべ3404語の記述が集められ, これらにおいて男子に比べ女子の方が多くの記述を算出し, 学年が上になるにしたがって記述が増加する傾向が示された。また出現頻度数3以上の記述を集計し, 感情語候補として脅威関連語70語, 抑うつ関連語75語, 怒り関連語75語, ポジティブ語90

Table 2 出現頻度3以上の感情語候補のリスト

脅威関連語候補		抑うつ関連語候補		怒り関連語候補		ポジティブ語候補	
悪夢	発表	あきた	つかれた	頭にきた	バカ	100点	楽しい
あせる	ハラハラ	あきらめ	つまらない	暑い	腹が立つ	Enjoy	食べる
嫌	ビクビク	雨	テスト	アホ	ひどい	愛情	誕生日
いやだ	びっくり	ありえない	転校	ありえない	ふざけるな	明るい	できる
裏切り	人前	いじめ	どうしよう	合わない	勉強	遊ぶ	テレビ
大勢の前	1人	いやだ	泣く	いい加減にしろ	むかつく	アニメ	電話
怒られる	ビビる	裏切り	なくす	怒り	ムカムカ	ありがとう	ドキドキ
おそろしい	ひやひや	怒られる	亡くなる	一方的	無視	イエーイ	得意
落ち着かない	不安	おちこむ	なぐられる	意味不明	命令	いっしょ	読書
おばけやしき	不審者	落ちる	敗北	いやがらせ	もういい	うきうき	友達
オロオロ	ふるえる	おもしろくない	罰	いやだ	やつあたり	うける	夏休み
ガクガク	勉強	ガーン	引越し	いやなこと	許せない	歌	ニコニコ
がびーん	ホラー映画	帰りたい	ひどい	イライラ	悪口	うれしい	日曜
気持ち悪い	みんなの前	火事	不幸	イラつく		映画	寝る
恐怖	面接	がっかり	へこむ	ウザい		笑顔	パソコン
緊張	ヤバイ	悲しい	勉強	うそ		絵を描く	ハッピー
暗い	やめて	傷つける	負け	うまくいかない		演奏	晴れ
ケガ	呼び出し	きらい	ミス	うるさい		おいしいもの	ピアノ
ケンカ	夜道	くそ	むかつく	怒った		おかし	部活
ゴキブリ	夜	苦痛	無視	怒られる		おこづかい	プリクラ
孤独	留守番	くやしい	むなしい	親		おしゃべり	プレゼント
こわい	忘れ物	暗い	無理	からかわれる		おもしろい	ベット
寒気	悪口	苦しい	無力	消えろ		音楽	ほうび
死		欠点	迷惑	きもい		買い物	ほめられる
試合前		けんか	やだ	キライな人		家族	マンガ
死ぬ		後悔	別れ	キレル		勝つ	満足
受験		ゴキブリ	悪い点	くそ		活気	メール
将来		孤独	悪口	悔しい		活やく	休み
初対面		こわされる		激怒		かんげい	やったー
知らないところ		最悪		ケンカ		希望	やる気
知らない人		最低		殺す		気持ちいい	友情
心配		さびしい		こわされる		休日	ゆかい
進路		死		最悪		ゲーム	良い
ストーカー		シカト		最低		元気	よい結果
先生		シクシク		シカト		幸福	よっしゃ
先輩		事件		自己中心的		興奮	よろこぶ
ゾクゾク		失敗		しつこい		最高	ラッキー
そわそわ		失望		失敗		しあわせ	理想
大会		死ぬ		死ぬ		自信	旅行
助けて		ショック		自慢		充実	ルンルン
注目		スランプ		ストレス		祝日	わーい
テスト		成績		だまれ		じょうず	わくわく
どうしよう		喪失		疲れ		勝利	笑う
ドキドキ		たいくつ		解けない		好き	
ドクドク		楽しくない		どなられる		スポーツ	
苦手		だめ		怒鳴る		成功	
バクバク		ため息		はあ?		成長	

語が得られた。

感情を喚起する項目の産出数に関する本研究の結果は、Neshat-Doost et al. (1999)と類似したものであった。すなわち、男子に比べ女子の方が多く感情語を産出する傾向があり、また学年が上がるにつれて産出数も増加する傾向が示されている。一方で学年差に関しては、実験課題で用いる視覚提示刺激としての感情語の検討ではないものの、中学生の感情を表す言葉について自由記述調査を行った浅野・小玉・杉江(2005)は、学年が上がるにつれて記述数が減少する傾向があることを述べており、今後の調査では学年差についても検討する必要があると思われる。

本研究で収集した感情語候補の中には今回収集された項目の中には「ウザい」(怒り関連語)や「おこづかい」(ポジティブ語)といった調査対象者である中学生にとって親和性が高いと思われる記述や、「ドクドク」(脅威関連語)や「ラッキー」(ポジティブ語)といった擬態語や自己陳述に近い記述などが含まれていた。坂本(2004)は調査対象者と記述の内容が関連することを示唆しており、本研究において中学生にとって妥当な記述が収集されたと考えられる。また成人を対象として収集された感情語を、視覚提示刺激として実験課題において、そのまま中学生に用いることが適切ではない可能性を示しており、実験対象者に応じた実験刺激(Vasey et al., 2003)の調査の必要性が改めて強調されたと言えよう。

また本研究の結果からは、「最悪」、「悪口」、「シカト」など脅威関連語と抑うつ関連語、怒り関連語の間で重複する単語が数多く見られた。鈴木(1998)は不安、抑うつ、怒りを表す感情語の構造は状況等によって変化しうることを示唆しており、これらの感情は必ずしも弁別しきれない可能性が考えられる。今後、本研究で収集された感情語候補について、中学生を対象に感情価の検討を行い、実際に視覚提示刺激として用いる際には可能な限り1つの感情に対応した感情語を用いることが望ましいと思われる。

引用文献

- 浅野麻美子・小玉正博・杉江征 2005 中学生はどのように感情をとらえているか? (1) —感情語レパトリーの視点から— 日本カウンセリング学会第38回大会発表論文集, 395-396.
- 荒木紀幸・梅本堯夫 1982 わが国における言語材料総覧. 兵庫教育大学研究紀要, 3, 59-96.
- Ehrenreich, J.T. & Gross, A.M. 2002 Biased attentional behavior in childhood anxiety A review of theory and current empirical investigation. *Clinical Psychology Review*, 22, 991-1008.
- 藤原裕弥・岩永誠・生和秀敏・作村雅之 2002 不安における注意バイアス, 潜在記憶バイアスに関する研究. 行動療法研究, 27, 13-23.
- 五島史子・太田信夫 2001 漢字二字熟語における感情価の調査. 筑波大学心理学研究, 23, 45-52.
- 五十嵐友里・嶋田洋徳 2005 社会不安における注意バイアスと解釈バイアス. 日本行動療法学会第31回大会発表論文集, 402-403.
- 金築優・伊藤義徳・山田幸恵・境泉洋・青山幸司・金井嘉宏・小山徹平・増田智美・石川信一・腰みさき・佐藤さやか・吉田諭江 2002 認知行動療法における認知の測定法: 情報処理パラダイムに基づく測定法 早稲田大学臨床心理学研究, 2, 59-68.
- McDonald, S.A. & Shillcock, R.C. 2001 Rethinking the Word Frequency Effect: The Neglected Role of Distributional Information in Lexical Processing. *Language and Speech*, 44, 295-323.
- Morrison, C.M. & Ellis, A.W. 1995 Roles of Word Frequency and Age of Acquisition in Word Naming and Lexical Decision. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 21, 116-133.
- Neshat-Doost, H., Moradi, A., Taghavi, R., Yule, W. & Dalgleish, T. 1999 The Development of a corpus of emotional words produced by chil-

- dren and adolescents. *Personality and Individual Differences*, 27, 433-451.
- 坂本正浩 2004 視覚呈示刺激としての脅威語の収集. 帝京大学心理学紀要, 8, 103-109.
- 鈴木常元 1998 不安, 抑うつ, 怒りを表す感情語の分析. 筑波大学心理学研究, 20, 217-223.
- 田辺洵一(編) 1997 例解小学国語辞典 三省堂.
- Vasey, M.W., Dalgleish, T. & Silverman, W.T. 2003 Research on Information-Processing Factor in Child and Adolescent Psychopathology: A Critical Commentary. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 32, 81-93.

付 記

本研究の分析にご協力いただきました筑波大学人間総合科学研究科の太田知里さん, 垣内文夫くん, 設楽紗英子さんに深く感謝いたします。また貴重なご助言をいただきました帝京大学文学部の坂本正浩先生に心より感謝いたします。